

愛知万博の会場変更を迫った国際的環境保護団体

写真は忘れもしない中日新聞 2000 年 1 月 14 日朝刊 1 面。愛知万博に BIE（博覧会国際事務局）が警告を発して、自然豊かな里山「海上の森」から会場変更されることになった。吉見俊哉『万博幻想』ちくま新書、2005 年で、何が壁を突き破らせたのか？と問題を投げかけている。大阪・関西万博にも関わる問題であり、抜粋して紹介したい。

BIE に愛知万博をあれほど厳しく批判させた直接の要因は、世界自然保護基金(WWF)などの国際的な環境保護団体の長からの数通の手紙にあった。BIE 幹部が来日する直前の 10 月末、WWF 事務局長は、BIE 議長に宛てて書簡を書き、愛知万博が海上の森に及ぼす影響についての懸念を表明した。同様の手紙は、バードライフインターナショナル事務総長からも出されていた。そこにはよりはっきりと、海上の森での住宅計画は中止するよう愛知県に勧告することや、会場予定地の海上の森では生態系を破壊せず、自然環境をフィールド展示するよう博覧会協会に勧告することなどが要望されていた。



グローバルな視点で見た場合、環境運動の広がりはずでに BIE の力をはるかに超えており、BIE 自身が 21 世紀に生き残っていくためにも、万博はこうした国際的な環境運動に支援してもらう必要があった。地元の市民団体からの手紙を受け取っただけでは動かなかった BIE も、国際的な自然保護組織からの勧告にはきわめて迅速に反応した。

だが、それではいったい誰が国際的な保護組織を動かしていったのだろうか。1995、96 年頃から、海上の森を守る地域の運動は、互いにネットワーク化しはじめていた。そしてこの地域的なネットワークは、96 年以降、全国的な環境組織とも緊密に結びついていく。96 年 11 月に BIE 議長が来日して会場候補地を視察し、推進、反対の両派と面談したとき、反対派の面談には、地元の 4 つの団体と日本野鳥の会、日本自然保護協会、WWFJ の中央の環境 3 団体が顔を揃えていた。このあたりから、瀬戸に根づいた保護派の運動と、3 つの全国組織の連携体制は緊密になりはじめていたようである。

とりわけ 98 年から 99 年にかけては、この連携が事態を変化させるのにきわめて大きな意味をもっていった。WWF などから BIE への書簡もまた、地元の保護派市民グループが基盤になりながらも、全国規模の環境団体が上位の国際組織を動かしていくことで可能になったものである。

愛知万博の動きを振り返ったのは、夢洲での大阪・関西万博とその後の IR カジノの行方を考えるためである。9 日レポートで紹介したように、上記の環境 3 団体が「夢洲の生物多様性の保全と回復を求める要望書」を提出した。愛知万博のように、国際的な環境保護団体を動かし、それが BIE に届くことを願ってやまない。まだ遅くはない。

(2022 年 4 月 13 日)